

文天祥の生涯について

1. 序

「文天祥」(梅原郁・ちくま学芸文庫)の裏表紙に次のように書かれています。一人の人間の生涯を描くにしてはあまりにも簡略ですが、その人となりと行動の要点はすべて押さえているように思えます。

「南宋末、忽必烈(フビライ)率いるモンゴル軍が南下し、王朝は危殆に瀕していた。政治の中枢は腐敗と混乱のなかにあったが、ひとりの秀才が敢然と挙兵し、防禦に当たる。文天祥その人である。だが、大勢に利はなく、あえなく囚われの身となり、その間に宋は三百年の歴史に幕を下ろすことになる。天祥は、フビライから宰相就任要請があるもこれを固辞。五言古詩「正気之歌」を遺してついに刑場に果てる。

反時代的なまでに儒教道徳に忠実で、純なる人間性を貫いた生涯。それは、人間のひとつの極限をわれわれに突きつける。」

2. 科挙・状元

天祥は、南宋第5代皇帝・理宗の治政下の端平3年(1236)に、広西路吉州廬陵県で生を受けました。幼年時代から、2人の弟と共に、父親の厳格な指導のもとに、ひたすら「科挙」を目指して勉学をさせられました。

天祥は宝祐3年(1255)に行われた科挙の第一次試験(郷試・解試)に19歳で合格し、翌年第二次試験(省試・会試)に合格し、第三次試験(殿試)に首席で合格しました。輝かしい官僚生活が始まらんとするその矢先に父が亡くなったので、故郷に帰り3年間の喪に服することになりました。

ここで「科挙」に合格、しかも首席(「状元」)で合格することが、如何に難関であるかをご理解していただくために、科挙制度について説明したいと思います。

科挙というのは、中国の「隋」王朝(581~618年)の初代皇帝・文帝が始めた官吏登用試験のことです。中央政府が全国から希望者をあつめて試験を行い、これに及第した者を官吏の有資格者と定め、必要に応じて中央政府に勤務させ、また各地方の高等官として派遣することにしたのです。

(「天子」と書くべきかもしれませんが、以下「皇帝」と表現します)

それまでの中国は貴族主義全盛の時代で、中央・地方を問わず人事について、貴族が幅をきかせていて、皇帝と雖も自らの意のままに人事を行うことができない状態でした。このような貴族の専横に我慢できなかったのが隋の文帝で、まず地方の人事権を地方の貴族の手から中央へ回収することに着手しました。身分・閥閥に左右されない公平な試験制度を編み出し、地方政府の高等官はすべて中央政府から任命派遣することに改めたのです。

隋は2代皇帝・煬帝で終り、その後の王朝「唐」の時代300年も、科挙制度は天子が貴族と戦うための武器として機能していました。唐の次の宋代になると、もはや皇帝に刃向かうほどの貴族はいなくなり、皇帝とその意を体した科挙出身の政治家が自由に手腕を揮うことができるようになっていました。宋を亡ぼしたモンゴル人の元王朝になると一時中断していましたが、少しずつ中国化が進むと再開されました。次の明王朝にも引き継がれ、満州人による清王朝も

踏襲しましたので、科挙による官吏任用は清朝末年にまで及びました。

科挙制度が機能していたその当時の中国では、多少の経済的余裕のある家庭では、子弟を何とかして科挙に合格させようと、涙ぐましい努力を払うのが常でした。科挙に合格した官僚が出れば、高収入であるうえに名誉を伴い、そのうえ有形無形の利益が期待できたからです。そこで世人が争って科挙の門をめがけて殺到することになり、どんどん「狭き門」となっていきました。

男の子は数え年5歳になると母から文字を教えられ、8歳に達するや正式に学問を始めさせられるのでした。金持ちや官吏の家では家庭教師を雇いますが、中流家庭では寺子屋のような所に入れるのでした。

最初は、「四書」(＝論語・孟子・大学・中庸)の丸暗記であり、15歳の頃までには「四書」「五経」(＝詩経・書経・礼記・易経・春秋)43万余字の一字一句をすべて完全に覚え込まなければならないという過酷な試験勉強でした。さらに、歴史、詩作、論文作成などの訓練にも多くの時間を費やさねばなりません。寝る間も惜しんで勉強したことでしょう。

文天祥の宋の時代には、科挙は3段階の試験でした。まず地方で「郷試」(解試)を行ってその合格者を中央に送り、中央政府で「会試」(貢試)を行い、続けて皇帝みずから行う「殿試」で最終的に決定するのが建前でした。

しかし、後世になると、だんだんこの3段階の本試験に附属する小試験が追加され、

清代になると非常に複雑なものになっていました。例えば、明代には科挙の前に予備試験のような意味で「学校試」が付け加えられました。即ち、明代に学校制度がつくられ、地方には府学、州学、県学が設けられました。それと同時に、科挙を受ける有資格者は必ずどこかの国立学校の生徒でなければならなくなりました。しかし、定員は多くても1校40名であるのに対して、その希望者が多いので、入学試験でふるいわけざるを得なくなったというわけです。しかもこれがまた大変で、県試(5回)→府試(3回)→院試の3段階の試験で順次ふるい落とされ、最後の院試にパスしなければ合格(入学)とならないものでした。

清朝末期の科挙制度では、学校試(県試5回→府試3回→院試)→科試(郷試を受ける学校の生徒の数を絞るため)→郷試(3回)→挙人覆試(会試の受験者数を絞るため)→会試(3回)→会試覆試(殿試では落第者を出さないようにするため)→殿試となり7段階の試験をパスしなければ科挙合格者にはなれなかったのです。

殿試の合格者を「進士」と呼びますが、そのうちの第1番～3番までを「第一甲」とし、第1番を「状元(じょうげん)」、2番を「榜眼(ぼうがん)」、3番を「探花(たんか)」と称しました。この3人は天子から「進士及第」という学位を賜り、非常な名誉とされ、また、及第の恩典がずば抜けて良かったのです。特に「状元」は他の進士と異なる破格の恩典を賜りました。

4番以下になると「第二甲」(第2組)の中に入れられ、比較的成績が上位というに

留まり、さらにその下に「第三甲」(第3組)がありました。

3. 文天祥の官歴

このように厳しい競争を勝ち抜いて進士に及第したとしても、その後は誰もが順風に帆を揚げて世間にもてはやされ、トントン拍子に官位が昇進していくとは限らなかったようです。たとえ状元であっても皆が皆、大臣や宰相にのぼれるものではなかったのです。

文天祥は、父の喪が明けると景定2年(1261)10月に臨安の都に赴任し、状元及第者に与えられる慣例となっていた職に就き、次いで殿試考官、刑部郎官と短期間のうちに異動しています。そして、モンゴル軍の南宋攻略が本格化するなかで遷都論を唱える一派に反論したため、知瑞州(現在の江西省宜春市一帯の行政長官)に転出(左遷)させられました。

その後も臨安に呼び戻され、そこで直言して左遷され、といった中央官と地方官の出入りの繰り返しで、結局これといった顕職には就いていません。個々の場面において天祥固有の言動を指摘することはできるとしても、歴史上特段の意義をもつ事項をあげることは難しいようです。

そもそも皇帝が進士(=科挙の合格者)に名誉を与え礼遇するのは、いざという時に朝廷の柱石となって働いてもらいたいためであり、特に状元は他の進士と異なる破格の恩典を賜る以上、状元もまたこの恩に感激して、その命を天子の馬前に投げ捨てる覚悟がなければならぬ、そういう立場な

のです。文天祥はそれを地でいったのであり、それが権勢を握っている者の怒りをかい、左遷を繰り返したのです。

当時の中国の状況は、中国北部を支配した「金」は既にモンゴル帝国によって滅ぼされ、金に南方へ追いやられた南宋はそのモンゴル軍の侵攻に耐えていた、そんな時代でした。臨安の南宋政府は混乱状態にあり、各地に勤王の檄が飛ばされましたが、それに応じて都に集まった者はわずか。それどころかモンゴル軍が接近するにつれて、政府高官が次々と姿をくらましていました。

(モンゴル帝国の第5代皇帝忽必烈がその国号を大元と改めたのは1271年ですから、それ以後は「元軍」と表現します。)

咸淳11年(徳裕元年・1275)正月、知贛州(贛州の行政長官)であった文天祥は、勤王の詔を受け取るや管下の土豪や少数民族の首領たちに指令して義勇兵を組織しました。しかし、政府内には天祥の性格を嫌う有力者たちが多く、臨安の外での待機を余儀なくされたり、臨安に入っても直ぐに激戦地の知蘇州に転出されたりしました。

元軍の臨安接近に狼狽した政府は、徳祐元年(1275)11月に天祥を臨安に急遽呼び戻しました。

翌徳祐2年(1276)正月に臨安中心部から東北にわずか15kmに軍を進めてきた元軍総大将・伯顔(バヤン)は、降伏について南宋の宰相・陳誼中との直接交渉を求めてきましたが、彼の弱腰を見越した天祥は自らその代役をかって出ました。

元軍の陣営に赴いた天祥は、凜然たる態

度で、蕩々と雄弁を振るって一步も譲りませんでした。そうした天祥を冷静に見つめていた伯顔は、天祥を戻したらかえってモンゴルに禍をなす危険があると判断し、陣内に軟禁してしまいました。

浅見綱齋の「靖献遺言」(講談社学術文庫)に、「遂に挺身命を奉じて元の軍に如き、伯顔と抗議争弁す。伯顔大いに怒り、群起呵斥す。天祥ますますみずから奮う。伯顔その挙動常ならざるを顧み、これを留めて還さず。天祥怒りてしばしば帰らんと言ふ。伯顔聴かず。」とあります。

伯顔は、文天祥を捕らえると同時に、臨安に使者を送り降伏を促しました。司令塔である皇帝の母・謝太后は、宰相は逃げ、天祥は還らず、武将たちは去った窮状を受け入れ、ついに降伏を伯顔に申し入れました。しかし、降伏直前に、皇帝の兄と弟を載いて福建・広東方面へと脱出した南宋の忠臣たちがいましたので、名目だけですが、なお数年は南宋王朝は命脈を保っていました。

軟禁されていた文天祥は、忽必烈のいる大都(今の北京)に連行されました。長い道中の途中、揚子江を渡る前に脱走し、元軍の監視の目を盗みつつ生死の間を彷徨い、3ヶ月あまりの必死の逃亡の末に、亡命政府のある福建に辿り着きました。

ただちに高位の官職(今風に言えば、副総理、防衛大臣、統合幕僚本部長とでも言えようか?)に任じられましたが、この政府内は彼を疎んじる者が腰抜けばかりで人材に欠け、統制もとれていない状態でした。

間もなく天祥は、幾ばくかの軍隊を引き連れてこの政府を離れ、独自の反攻計画の

実行に移りました。もはや南宋の亡国は時間の問題であろうことは判っていたのですが、状元宰相文天祥の名にふさわしく、最後の最後まで抵抗して皇帝陛下の恩義に報いようとしたのです。しかし、ゲリラ戦を主とした反攻計画には限界があり、大軍を投じてきた元軍の猛攻に追い詰められました。今は之までと、懐中から用意した毒薬を取り出し素早く口に含んだがこれが全く効かず、ついに天祥は捕らえられてしまいました。1278年12月末でした。

元軍は大艦隊をもって最後の抵抗を続ける南宋軍に迫りましたが、無用な戦闘を避け、犠牲を出すことなく降伏させようと考えており、説得させるために文天祥を同行していました。もちろん天祥はそれを拒否しました。元軍の総攻撃により、最後の抵抗も空しく宋王朝はその命脈を閉じました。1279年2月のことでした。元軍の艦船の上で、天祥はその様を目にしていました。

文天祥は大都に連行され、至元16年(1279)10月に3m四方の狭い地下牢に押込められました。忽必烈は南宋の領域(=江南の地)を掌握するために南宋の人材を活用するという考えを持っており、最後までモンゴルに屈しなかった気骨のある文天祥を何とかして江南支配の枢要ポストに据えたいと思っていました。

忽必烈は辛抱強く天祥の改心を待ちましたが、次第に早く始末すべしとの周囲の空気が強くなり、何らかの処分を行わなければおさまりがつかなくなってきました。

至元19年(1282)12月、文天祥は忽必烈の前に引き出されました。宰相の地

位を与えるとの忽必烈の言を断固として拒絶し、死を切望するばかりでした。今はこれまでと判断した忽必烈は文天祥の臨み通りにすることに意を決し、翌日文天祥は死刑を執行されました。

浅見綱齋の「靖献遺言」には、「天祥、刑に臨み、殊て従容とし、吏卒に謂ひていはく、『吾が事畢（おは）る』と。南向再拝して死す。年四十七。」とあり、また、「文山状元宰相を以て孤忠を奮ひて以て国に報い、…疲卒を提げ、勍敵に当り、流離顛沛、困苦艱危」「…苦戦して支えずして帰ると雖も、元の君相を長揖して拝せず。蓋しこの身、壘（ナマス）になすべく粉にすべし。志、威武を以て屈すべからず。これを従容死に就きて以て仁を成すに卒ふ。その大節、宇宙の間に炳耀軒轟し、凜凜乎として万世君臣の大義に立つ。」「…即ちその忠賢、千古に冠絶する、豈人の能く及ぶ所ならんや。」とあり、以上のことを短文ながら意を尽くして説いています。

4. 正気之歌

状元宰相としての誇りから、獄中であっても、それに相応しくない醜さを表わしてはならないと固く心に決めて、じっと困苦に耐えていました。「正気之歌」はそんな獄中に於いて記したものです。その序文に次のようにあり、その凄絶な様が描かれています。

「暗い牢屋に座っていると、もろもろのエネルギーが自分を責めさいなむ。

第一は水気。地面より低い楼の中には、少し雨が降り続くと水が容赦なく流れ込み、

ベッドや机を浮かせる、

第二は土気。水が引けば、壁や床はどろどろになり、立ち上る水蒸気は一面に立ちこめる。

第三は日気。風がそよぎもしない暑い夏、晴れた日が続くと牢は蒸し風呂となる。

第四は火気。牢のかたわらで、日に三度の食事の支度がなされる。その煙と熱気が小さい窓を通して入ってくる。

第五は米気。牢と隣り合わせの倉庫に米が山と積まれ、その腐敗しかけた臭いが鼻をつく。

第六は人氣。監視の蒙古人のなまぐさい体臭、自分の垢と汗のやりきれない悪臭。

そして最後は穢気。まわりに棄てられるごみ。鼠の屍体、排泄物の臭い。」

（梅原郁「文天祥」に掲載の和訳文を引用しています）

なお、「正気之歌」については、長くなりますので別稿としております。そちらもご覧ください。

下の図は、文天祥が勤務（知瑞州、知贛州）した江西省の所在を示したものです

